The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『説苑』『孔子家語』に見える「孔子祭魚」説話について
Author(s)	矢田, 尚子
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 92-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58666
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　称号（総六十号記念号）平成二十七年六月　九二―一〇六頁

『説苑』『孔子家語』に見える「孔子祭魚」説話について

矢田尚子

はじめに

漢代に編まれたとされる『孔子家語』の巻二に、次のような説話（以下「孔子祭魚」と称する）が収録されている（注1）。

孔子之楚、而有漁者而獻魚焉。孔子不受。漁者曰、天暑市遠、無所鬻也。思慮棄之糞壤、不如獻之君子。故敢以進焉。於是夫子再拜受之、使弟子掃地將以享祭。門人曰、彼將棄之、而夫子以祭之、何也。孔子曰、吾聞諸。惜其腐餼、而欲以務施者、仁人之偶也。惡有受仁人之饋而無祭者乎。（孔子楚に之くに、而ち漁者有りて魚を獻ず。孔子受けず。漁者曰く、「天暑く市遠ければ、鬻ぐ所無きなり。思慮するに之れを糞壤に棄つるは、之れを君子に獻ずるに如かず。故に敢えて以て進む」と。是こに於いて夫子は再拜して之れを受け、弟子をして地を掃きて將に以て享祭せしめんとす。門人曰く、「彼は將に之れを棄てんとするに、夫子以て之れを祭るは、何ぞや」と。孔子曰く、「吾れ諸れを聞く。其の腐餼を惜しみて、以て施しを務めんと欲する者は、仁人の偶いなりと。惡んぞ仁人の饋を受けて祭る無きこと有らんや」と。）

楚にやってきた孔子に、一人の漁師が魚を献上するが、孔子は受け取ろうとしない。漁師は「暑い上に市場が離れているため、せっかく捕った魚を売ることができない。捨てるよりは君子に献上する方がましだと思って持ってきたのだ」と説明する。すると孔子は再拜して魚

を受け取り、門人に命じてその魚を祭る準備をさせる。訝る門人に対して孔子は「残り物を腐らせることを惜しんで施しをするのは、仁人の仲間だと聞いている。どうして仁人から献上されたものを祭らずにいられようか」と答える。

この説話の趣旨は何だろうか。漁師がその言葉通り、棄てるよりはましだと思って魚を孔子に献上したのであれば、そうした無礼な漁師をかばう孔子の優しさを描いたものとして読むことができよう。しかし漁師が本当に「仁人」なのだとしたら、そして、孔子に魚を受け取らせるために、「棄てるよりはましだ」と説明したのだとしたら、どうだろうか。文中からは漁師の人物像を読み取ることができず、それがこの説話の趣旨をわかりにくいものにしているように思われる。

また、説話の舞台が楚であること、登場人物が孔子と漁師であることから、読者の脳裏には『論語』微子篇に見える楚の狂接輿や『荘子』雑篇「漁父篇」の漁父が浮かび、この漁師も彼らと同様にただ者ではなく、何か意図があって魚を献上したのではないかという疑念もわいてくる。

小論ではこの「孔子祭魚」説話を取り上げ、漢代に編まれた説話集である『新序』や『説苑』に収録される説話との関係性を手がかりとして、その成り立ちについて考えてみたい。

一、『孔子家語』『説苑』の収録位置から見た「孔子祭魚」

現行の『孔子家語』は十巻四十四篇から成り、「孔子祭魚」は巻二「致思篇」に収録されている。同書の各篇には、概ね篇名に沿う内容の説話が収録されている。例えば、巻一の「相魯篇」には、孔子が魯に相として仕えていたときの話が、「始誅篇」には、魯の大司寇となった孔子が初めて罪人を誅したときの話が収められている。

しかし、内容に一貫性が認められない雑多な説話を集めた篇も存在しており、その場合、首章に置かれた説話をもとに便宜的に篇名がつけられている。全四十四篇のうち、「致思篇」を含む八篇がそれに当たる。「致思篇」は、孔子が農山に登って「斯(こ)こに於いて思いを致さば、至らざる所無し」と嘆じ、子路・子貢・顔淵にそれぞれの志を述べさせたという首章の説話から便宜的につけられた篇名である。したがって「致思」という篇名やそこに収録される他の説話群と「孔子祭魚」との間に関連はなく、書中の収録位置からその趣旨を推測することは難

しい。

では、他の書物に見える「孔子祭魚」からは何か手がかりが得られるだろうか。

「孔子祭魚」は『孔子家語』のほか、『説苑』巻五「貴徳篇」にも見える。

孔子之楚、有漁者獻魚甚強。孔子不受。獻魚者曰、天暑遠市、賣之不售、思欲棄之、不若獻之君子。孔子再拜受、使弟子掃除將祭之。弟子曰、夫人將棄之、今吾子將祭之、何也。孔子曰、吾聞之。務施而不腐餘財者、聖人也。今受聖人之賜、可無祭乎。

（孔子楚に之くに、漁者の魚を獻ずること甚だ強うる有り。孔子受けず。魚を獻ずる者曰く、「天暑く市に遠ければ、之れを賣らんとするも售れず、思うに之れを棄てんと欲するは、之れを君子に獻ずるに若かず」と。孔子再拜して受け、弟子をして掃除して將に之れを祭らしめんとす。弟子曰く、「夫の人は將に之れを棄てんとするに、今　吾が子　將に之れを祭らんとするは、何ぞや」と。孔子曰く、「吾れ之れを聞く。施しを務めて餘財を腐らせざる者は、聖人なりと。今　聖人の賜を受くれば、祭ること無かるべけんや」と。）

『説苑』は、『漢書』芸文志の「諸子略」儒家の部に「劉向所序六十七篇」とあり、そこに付せられた班固の自注に「新序・説苑・世説・列女傳・頌圖なり」とあることから、漢末の劉向によって編纂された書物であることが明らかである。また『漢書』劉向伝によれば、劉向は「天子を戒」めるために『列女伝』八篇を編纂するとともに、様々な事柄や事跡を集めて『新序』と『説苑』併せて五十篇を著わし、皇帝に献上したのだという(注2)。

そして宋本『説苑』に付せられた劉向の「説苑叙録」には次のようにある。

護左都水使者光禄大夫臣向言。所校中書説苑雜事、及臣向書・民間書誣校讎、其事類衆多、章句相溷、或上下謬亂、難分別次序。除去與新序復重者、其餘者淺薄不中義理、別集以爲百家。復(注3)令以類相從、一一條別篇目、更以造新書(注4)十萬言以上、凡二十篇、七百八十四章、號曰新苑、皆可觀。臣向昧死(注5)。

（護左都水使者光禄大夫臣向言す。校する所の中書の『説苑雜事』、臣向の書・民間の書及誣に(注6)校讎するに、其の事類は衆多にして、章句相い溷れ、或いは上下謬亂して、次序を分別し難し。『新序』と復重する者、其の餘の者の淺薄にして義理に中らざるものを除去し、別に集めて以て百家と爲す。復た類を以て相い從わしめ、一一篇目を條別し、更に

以て新書十萬言以上、凡て二十篇七百八十四章を造り、號けて『新苑』と曰えば、皆な観るべし。臣向昧死。）

この記述にしたがうならば、劉向は当時存在していた『説苑雑事』の諸本を校勘し、すでに編集済みであった『新序』と重複するもの、内容のふさわしくないものなどを削除し、それらを種類ごとに分けてそれぞれに篇目を立て、『新苑』すなわち新たな『説苑』を編集したということになる。つまり「孔子祭魚」が収録されている『説苑』巻五「貴徳篇」は、「徳を貴ぶ」ことを説く同類の説話を集めた篇だと考えられる。

しかし、「孔子祭魚」が孔子を有徳者として描いた説話なのか、それとも漁師を有徳者として描いた説話なのかがわからないため、『説苑』中の収録位置からもこの説話の趣旨を決定することは難しいと言わざるを得ない。

二、『説苑』『孔子家語』と出土文献

ところで、『孔子家語』と『説苑』の「孔子祭魚」を比較すると、内容はほとんど変わらないが、細かい部分で次のような相違が認められる。

漁師が魚を献上する理由を孔子に説明する際、『説苑』所収のものでは「思うに之れを棄てんと欲するは、之れを君子に獻ずるに若かず」と述べているのに対し、『孔子家語』所収のものでは「思慮するに之れを糞壤に棄つるは、之れを君子に獻ずるに如かず」と述べている。魚を「糞壤（汚れた土）に棄」てることと「君子に獻ずる」こととを並べて比較しているという点で、『孔子家語』所収の「孔子祭魚」の漁師には君子（孔子）を軽視する態度が表れているように思われる。

また、孔子が漁師のことを弟子に説明する際、『孔子家語』所収のものでは「腐餘を惜しみて、以て施しを務めんと欲する者は、仁人の偶いなり」と述べ、『説苑』所収のものでは「施しを務めて餘財を腐らせざる者は、聖人なり」と述べているという違いが見られる。「腐らせることを惜しんで施しをする者」と「施しをして（その結果）余り物を腐らせない者」とでは、施しをする動機が異なり、前者の方にマイナスのイメージが伴うであろう。加えて、「仁人の偶い」と「聖人」とでは、前者の方が後者よりも劣るであろう（注7）。

このように両書の「孔子祭魚」を比較した場合、わずかではあるが『孔子家語』のものの方が、『説苑』のそれよりも、漁師を無礼で評価の低い人物として描いてい

るように見受けられる。『孔子家語』の方には、この説話を「無礼な漁師をかばう孔子の優しさ」を描いたものとして読ませようという姿勢が表れているように見受けられるのである。

『孔子家語』は、『漢書』芸文志「六芸略」の論語部に「孔子家語二十七巻」と記載されているものの、顔師古注に「今有る所の家語には非ず」とあることから、長い間、現行の『孔子家語』十巻は魏の王肅による偽作であって、『漢書』芸文志に見える『孔子家語』二十七巻とは異なるとされてきた(注8)。

ところが、一九七三年に河北省定州八角廊四十号漢墓から定州漢墓竹簡『儒家者言』が、一九七七年に安徽省阜陽県双古堆一号漢墓から阜陽漢墓一号木牘章題が出土し、それらに現行の『孔子家語』と内容の重なるものが含まれていることが明らかとなって以降、王肅偽作説は退けられ、その資料的価値の見直しがなされている。

また、これら出土文献との比較により、現行の『説苑』・『孔子家語』などに収録されている説話の原初的な形のものが前漢期に存在していたこと、そしてそれが現行の『孔子家語』所収のものよりも『説苑』所収のものに近いことも指摘されている(注9)。

たとえば寧鎮疆氏は、『儒家者言』と『説苑』・『孔子家語』の対応箇所を比較し、『説苑』の方が『儒家者言』と合致する箇所が多く、『孔子家語』に後人の手が入っていることを指摘している(注10)。

福田哲之氏は、一号木牘章題・『儒家者言』と『説苑』・『孔子家語』に見える孔子の呼称を比較して、一号木牘章題・『儒家者言』に孔子の呼称として見える「孔子」・「子」・「中尼」が、『説苑』の対応箇所では合致するが、『孔子家語』の対応箇所ではすべて「孔子」になっていることを指摘し、『孔子家語』の「後代性」を示すものだとする(注11)。

つまり、現行の『孔子家語』や『説苑』は、出土文献に見えるような説話群を素材として編まれたものだと考えられ、比較すると『説苑』所収の説話の方が素材の原型を残しており、『孔子家語』所収の説話には、後人の手が加えられていると考えられるのである。

ところで、上記の漢墓から出土した説話群には「孔子祭魚」と思われるものも含まれる。一号木牘章題には「孔子之楚有獻魚者」と(注12)、『儒家者言』第六章には「□漁者曰天暑而得弓〔之不□□〕」、「將祭之□〔乎孔子曰〕」と見え(注13)、この説話が前漢期に存在し、『説苑』や『孔子家語』の素材となった可能性を示しているのである。しかし残存部分が少ないため、両書のどちらに近

いかまでは判別できない。したがってここでは、先行研究における他の説話の比較結果から類推して、『説苑』の「孔子祭魚」の方が『孔子家語』のそれよりも原初的な形を残している可能性を指摘するにとどめたい。

三、説話の登場人物と趣旨との関係

ところで、先に見た「説苑叙録」によれば、劉向は『説苑』を編纂するに当たって、先行の『説苑雑事』から『新序』と重複するものを取り除いたという。しかし現行の『説苑』と『新序』には、重複する説話がいくつか存在する。それら重複する説話の中には、登場人物・内容ともにほぼ同じであるものや(注14)、登場人物や話の内容は同じで筋書きが多少異なっているものの他(注15)、話の内容や筋書きが似ているが登場人物が異なっているものがある。

たとえば『新序』巻二「雑事篇」に、燕の宰相と一人の大夫との問答から成る次のような説話が収められている。

昔者、燕相得罪於君、將出亡、召門下諸大夫曰、有能從我出者乎。三問、諸大夫莫對。燕相曰、嘻、亦有士之不足養也。大夫有進者曰、亦有君之不能養士。安有士之不足養者。凶年饑歲、士糟粕不厭、而君之犬馬有餘穀粟。隆冬烈寒、士裋褐不完、四躰不蔽、而君之臺觀帷幕錦繡、隨風飄飄而弊。財者、君之所輕、死者、士之所重也。君不能施君之所輕、而求得士之所重、不亦難乎。燕相遂慙、遁逃不復敢見。(昔者、燕の相　罪を君に得て、將に出亡せんとし、門下の諸大夫を召して曰く、「能く我に從いて出ずる者有るか」と。三たび問うも、諸大夫對うる莫し。燕相曰く、「嘻、亦た士の養うに足らざること有らんや」と。大夫の進む者有りて曰く、「亦た君の士を養うこと能わざること有るのみ。安くんぞ士の養うに足らざる者有らんや。凶年饑歲、士は糟粕も厭かざるに、君の犬馬は穀粟を餘す有り。隆冬烈寒、士は裋褐完たからず、四躰蔽わざるに、君の臺觀は帷幕錦繡、風に隨いて飄飄として弊る。財は、君の輕んずる所にして、死は、士の重んずる所なり。君　君の輕んずる所を施すこと能わずして、士の重んずる所を得んことを求むるは、亦た難からずや」と。燕の相　遂に慙じて、遁逃して復た敢えて見ず。)

内容はおおむね以下のようである。

燕の宰相が君主に罪を得て亡命するに際し、自分

と生死を共にする者を門下の大夫たちから募ろうとするが、誰も応じないため、「養い甲斐のある士などいないものだ」と嘆く。それを聞いた大夫の一人が「あなたが軽んじて無駄遣いしている金銭を門下の者たちに施していれば、彼らが重んじている彼らの生命を得ることは簡単でしょう」と述べる。その言葉を聞いた宰相は、自らを恥じて逃げ去る。

これとほぼ同じ内容のものが、『説苑』巻八「尊賢篇」には、斉の相である宗衛と門尉の田饒との問答から成る説話として収録されている(注16)。

宗衛相齊、遇逐罷歸舍。召門尉田饒等二十有七人而問焉曰、士大夫誰能與我赴諸侯者乎。田饒等皆伏而不對。宗衛曰、何士大夫之易得而難用也。饒對曰、非士大夫之難用也。是君不能用也。宗衛曰、不能用士大夫何若。田饒對曰、厨中有臭肉、則門下無死士。今夫三升之稷不足於士、而君鴈鶩有餘粟。紈素綺繡、靡麗堂楯、從風雨弊、而士曾不得以緣衣。果園梨栗、後宮婦人摭以相擿、而士曾不得一嘗。且夫財者、君之所輕也。死者士之所重也。君不能用所輕之財、而欲使士致所重之死、豈不難乎哉。於是宗衛面有慚色、逡巡避席而謝曰、此衛之過也。(宗衛齊に相たりて、逐罷に遇いて舍に歸る。門尉の田饒等二十有七人を召して焉(これ)に問いて曰く、「士大夫誰か能く我と諸侯に赴く者か」と。田饒等皆な伏して對えず。宗衛曰く、「何ぞ士大夫の得易くして用い難きや」と。饒對えて曰く、「士大夫の用い難きに非ざるなり。是れ君用いること能わざるなり」と。宗衛曰く、「士大夫を用いること能わざるは何若(いかん)」と。田饒對えて曰く、「厨中に臭肉有れば、則ち門下に死士無し。今　夫れ三升の稷　士に足らざるに、君の鴈鶩に餘粟有り。紈素綺繡は堂楯を靡麗にし、風雨に從いて弊るに、士は曾(すなわ)ち以て衣に緣するを得ず。果園の梨栗、後宮婦人は摭(ひろ)いて以て相い擿(う)つに、士は曾ち一も嘗(な)むるを得ず。且つ夫れ財は、君の輕んずる所なり。死は士の重んずる所なり。君　輕んずる所の財を用いること能わずして、士をして重んずる所の死を致さしめんと欲すれば、豈に難からざらんや」と。是ここに於いて宗衛の面に慚色有り、逡巡して席を避けて謝して曰く、「此れ衛の過りなり」と。)

登場人物以外にも細かい部分では違いが見られるが、普段、奢侈な生活を送って大夫らの窮乏を放置しておきながら、自らが危急に陥ると彼らに頼ろうとする宰相に対して、一人の大夫が訓戒を垂れるという説話の趣旨は

一致している。

こうした重複の仕方は、訓戒説話において、登場する人物が誰であるかということよりも、訓戒の内容の方が重要視されていることを示す。登場人物が替わろうと、説話の趣旨は変化しないのである。

ところが、登場人物が替わるとともに説話の趣旨が変化している例もみられる。特に、孔子が登場人物に加えられることによって、説話の趣旨が変化している例として、『新序』巻二「雑事篇」と『孔子家語』巻八「屈節解篇」に見える宓子賤の説話がある。

まず『新序』に収録されるものをあげる。

魯君使宓子賤爲單父宰。子賤辭去、因請借善書者二人、使書憲書教品。魯君予之。至單父、使書、子賤從旁引其肘、書醜、則怒之。欲好書、則又引之。書者患之、請辭而去、歸以告魯君。魯君曰、子賤苦吾擾之、使不得施其善政也。乃命有司無得擅徵發單父。單父之化大治。故孔子曰、君子哉、子賤。魯無君子者、斯安取斯。美其徳也。（魯君　宓子賤をして単父の宰爲らしむ。子賤辭去するに、因りて書を善くする者二人を借りて、憲書・教品を書かしめんことを請う。魯君　之れを予う。単父に至り、書かしむるに、子賤　旁らより其の肘を引きて、書　醜くければ、則ち之れを怒る。好く書かんと欲すれば、則ち又た之れを引く。書く者は之れを患い、辭せんことを請いて去り、歸りて以て魯君に告ぐ。魯君曰く、「子賤は吾れの之れを擾して、其の善政を施すを得ざらしむるを苦しむならん」と。乃ち有司に命じて擅に単父より徵發するを得ること無からしむ。単父の化　大いに治まる。故に孔子曰く、「君子なるかな、子賤。魯に君子無くんば、斯れ安んぞ斯れを取らんや」と。其の徳を美むるなり。）

単父の宰に任命された宓子賤は、赴任時に二人の書記官を連れて行くが、いざ書類を書かせる段になると、彼らの肘を引いて邪魔をする。書記官たちからの苦情を聞いた魯君は「私が宓子賤の単父統治を妨げていることを暗示しているのだろう」と、それが宓子賤による訓戒であることを見抜き、単父からの租税や人夫の徵収をやめさせる。その結果、単父はよく治まった、という内容である。

この話は、直言を避けた宓子賤の聡明さを称えるとともに、彼の真意を即座に理解し、自らの過ちを改めた魯君の聡明さをも称える内容となっており、為政者に対する訓戒説話と見なすことができる。説話の最後に、弟子である宓子賤を褒め称える孔子の言葉があるが、『論語』

公冶長篇に見えるもの(注17)を付け足したに過ぎず、たとえこれがなかったとしてもさほど変化はない。

一方、『孔子家語』に収録されたものには、孔子が登場人物として現れている。

孔子弟子有宓子賤者、仕於魯、為單父宰。恐魯君聽讒言、使己不得行其政。於是辭行、故請君之近史二人、與之俱至官。宓子戒其邑吏、令二史書。方書、輒掣其肘、書不善、則從而怒之。二史患之、辭請歸魯。宓子曰、子之書甚不善。子勉而歸矣。二史歸報於君曰、宓子使臣書、而掣肘、書惡而又怒臣。邑吏皆笑之。此臣所以去之而來也。魯君以問孔子。子曰、宓不齊君子也。其才任霸王之佐、屈節治單父、將以自試也。意者、以此為諫乎。公寤太息而歎曰、此寡人之不肖。寡人亂宓子之政、而責其善者非矣。微二史、寡人無以知其過、微夫子、寡人無以自寤。遽發所愛之使、告宓子曰、自今已往、單父非吾有也。從子之制、有便於民者、子決為之、五年一言其要。宓子敬奉詔、遂得行其政。於是單父治焉。躬敦厚、明親親、尚篤敬、施至仁、加懇誠、致忠信、百姓化之。(孔子の弟子に宓子賤なる者有りて、魯に仕え、單父の宰と為る。魯君の讒言を聴き、己をして其の政を行うを得ざらしめんことを恐る。是こに於いて辭して行くに、故に君の近史二人を請い、之れと俱に官に至る。宓子　其の邑の吏を戒め、二史をして書かしむ。方に書かんとするに、輒ち其の肘を掣き、書　善からざれば、則ち從りて之れに怒る。二史　之れを患え、辭して魯に歸らんことを請う。宓子曰く、「子の書は甚だ善からず。子勉やかに歸れ」と。二史歸りて君に報じて曰く、「宓子臣をして書かしむるも、肘を掣き、書　惡しければ又た臣に怒る。邑吏皆な之れを笑う。此れ臣の之れを去りて來たる所以なり」と。魯君以て孔子に問う。子曰く、「宓不齊は君子なり。其の才は霸王の佐に任ずるも、節を屈して單父を治むるは、將に以て自ら試みんとするなり。意うに、此れを以て諫めと為すか」と。公　寤りて太息して歎じて曰く、「此れ寡人の不肖なるなり。寡人は宓子の政を亂して、其の善を責むるは非なり。二史微かりせば、寡人以て其の過ちを知る無く、夫子微かりせば、寡人以て自ら寤る無し」と。遽かに愛する所の使を發し、宓子に告げしめて曰く、「今より已往、單父は吾が有に非ざるなり。子の制に從い、民に便なる者有らば、子決して之を為し、五年に一たび其の要を言え」と。宓子　敬みて詔を奉じ、遂に其の政を行

うを得たり。是ここに於いて單父治まる。躬ら敦厚にして、親親を明らかにし、篤敬を尚び、至仁を施し、懇誠を加え、致忠信を致せば、百姓は之れに化す。）

『新序』所収のものに比べ、各所に詳細な説明が加えられており、後人の手が入っていることが明らかである。また、魯君は書記官の訴えを聞いても宓子賤の意図を理解できず、孔子に説明を求めてようやく悟り、自らの非を改めている。したがって、この説話の趣旨は、宓子賤と、彼の意図を即座に察した孔子の聡明さを称賛することにあるのであり、『新序』のものに比べると、魯君を称賛する視点が大幅に後退している。登場人物に孔子が加わることによって、「悟り改める主君」を主題とする、為政者のための訓戒説話から、「教え諭す宓子賤と孔子」を主題とする儒家説話へと変化しているのである。

四、『新序』の「楚人献魚」

前章で見た宓子賤説話の例のように、『孔子家語』・『説苑』の「孔子祭魚」と筋書きが似ているものの、登場人物が異なる例として、『新序』巻二「雑事篇」に収録される次の説話（以下、「楚人献魚」と称する）があげられる。「孔子祭魚」と同じく、魚を献上する漁師が登場するのであるが、献上する相手は、孔子ではなく楚王である。

楚人有献魚楚王者曰、今日漁獲、食之不盡、賣之不售、棄之又惜。故來獻也。左右曰、鄙哉辭也。楚王曰、子不知漁者仁人也。蓋聞、困倉粟有餘者、國有餓民、後宮多幽女者、下民多曠夫、餘衍之蓄聚於府庫者、境内多貧困之民。皆失君人之道。故厨庖有肥魚、廐有肥馬、民有餓色。是以亡國之君藏於府庫。寡人聞之久矣、未能行也。漁者知之、其以此諭寡人也。且今行之。於是乃遣使、恤鰥寡而存孤獨、出倉粟、發幣帛而振不足、罷去後宮不御者、出以妻鰥夫。楚民欣欣大悦、鄰國歸之。故漁者、壹獻餘魚、而楚國賴之。可謂仁智矣。（楚人に魚を楚王に獻ずる者有りて曰く、「今日漁り獲しもの、之れを食らえども盡きず、之れを賣れども售れず、之れを棄つるは又た惜し。故に來たりて獻ずるなり」と。左右曰く、「鄙なるかな、辭や」と。楚王曰く、「子は漁者の仁人なるを知らざるなり。蓋し聞く、困倉の粟に餘り有る者は、國に餓える民有り、後宮に幽女多き者は、下民に曠夫多く、餘衍の蓄え府庫に聚まる

者は、境内に貧困の民多し。皆な人に君たるの道を失う。故に厨庖に肥魚有り、廐に肥馬有り、民に餓色有り。是こを以て亡國の君は府庫に藏むと。寡人は之れを聞くこと久しきも、未だ行うこと能わざるなり。漁者は之れを知りて、其れ此れを以て寡人を諭すなり。且に今　之れを行わんとす」と。是こに於いて乃ち使を遣わして、鰥寡を恤みて孤獨を存し、倉粟を出だし、幣帛を發して足らざるを振い、後宮の御せざる者を罷け去らしめ、出だして以て鰥夫に妻わす。楚民は欣欣として大いに悅び、鄰國は之れに歸す。故に漁者、壹たび餘魚を獻じて、楚國は之れに賴る。仁智と謂うべし。）

内容をまとめると以下のようになる。

一人の漁師が、売れない魚を捨てるのが惜しいからという理由で、楚王に献上しにやってくる。王の側近たちは、無礼な奴だと言って漁師を非難するが、楚王は彼を「仁人」だとし、その理由を次のように説明する。「宮中の厨房には太った魚があり、廐には太った馬がいて、贅沢三昧の生活をしている一方で、民が飢餓に苦しんでいるというような国の王は、亡国の君主であると聞く。そのことを熟知する漁師は、私を教え諭すために魚を献上したのだ」と。そして楚王が宮中の余財を放出して民に分け与えたところ、楚の民は大いに喜び、隣国の民すらも楚国に帰属したという。

漁師が果たして本当に楚王を諭すことを目的として魚を献上したのかどうかは、文中から読み取ることができない。しかしこの説話が、漁師の献魚をきっかけとして自らの治政を改めた楚王の聡明さを称賛するものであることは確かであろう(注18)。

楚が舞台となっている点、一人の漁師が魚を献上して「売れ残りの魚を捨てるよりは献上する方がましだ」と話している点、周囲の人間が漁師を非難する点など、「楚人献魚」と「孔子祭魚」はよく似た構造を持つが(注19)、登場人物の違いから、説話の趣旨は大きく異なっている。楚王を主人公とする「楚人献魚」は、為政者に対する訓戒を目的とした説話だということが明確であるが、孔子を主人公とする「孔子祭魚」にはそうした訓戒の要素が見られず、説話の趣旨が明確になっていないのである。

「楚人献魚」では、余った魚を献上する漁師の無礼を咎めるどころか、それを治政に対する訓戒と見なして悟り改める楚王の寛容さ、聡明さが描かれていた。漁師が実際に訓戒を目的として魚を献上したのかどうかは文章から読み取れないものの、それは「悟り改める主君」と

いう説話の主題には影響しない。

一方、「孔子祭魚」には、同じように魚を献上する漁師が登場するが、説話の主人公は楚王から孔子に替わっている。それにしたがって「悟り改める主君」という説話の主題も変化しているのであるが、それは「楚人献魚」のように明確なものではなくなってしまっている。文章からは読み取ることのできない漁師の人物像が主題に影響を及ぼし、それによって「無礼な漁師と彼をかばう孔子」と「仁人（聖人）である漁師とそれを見抜く孔子」の二通りの主題を想定し得るようになってしまうからである。

おわりに

小論第二章で見たように、『新序』や『説苑』は、定州漢墓竹簡『儒家者言』や阜陽漢墓一号木牘章題に見えるような説話を素材として編まれたものであると考えられる。そもそもそうした説話は、いにしえの君臣、聖人や賢人などの言動を物語に仕立てたものであるが、口承・伝写を重ね、諸子の学説や思想を主張するために用いられるうちに、さまざまに変化し、改変されたであろうことは想像に難くない。そしてそうした改変にも巧拙があり、改変の結果、説話の趣旨が明瞭になる場合もあれば、そうでない場合もあったと考えられる。

そのように説話が改変されてきた可能性を考慮に入れるならば、「孔子祭魚」もまた、「楚人献魚」の「魚を献上する漁師」というモティーフを利用し、主人公を楚王から孔子に替えることで、為政者のための訓戒説話を、孔子とその思想を称賛する儒家説話に改変しようとした結果、作り出されたものだと考えられるのではないだろうか。

『新序』所収の「楚人献魚」に比べると、『孔子家語』・『説苑』に見える「孔子祭魚」は、同じ「魚を献上する漁師」というモティーフを用いながら、説話としての明快さに欠ける。それは、説話の改変が成功していないことに起因するのだろう。

小論第二章において、『孔子家語』所収の「孔子祭魚」が、『説苑』所収のものに比べて、漁師のイメージを引き下げるような表現を用いていることを指摘したが、それは、不明瞭になった説話の趣旨を「無礼な漁師と彼をかばう孔子」の方に統一させようとする意識が働いたためなのではないだろうか。

小論で取り上げた『孔子家語』や『新序』・『説苑』といった説話集については、書物としての成立や、儒家思

想を伝える書としての側面に注目した先行研究が多く(注20)、収録された説話を物語として分析する視点はこれまで少なかったように思われる。しかし、小論で試みたように、個々の説話に表れるモティーフや説話間の関係性に目を向けることによって、説話の形成と変容の様相を探ることができるという意味においても、これらの書物は資料としての価値を有するのである。

注

(1) 巻二「致思篇」。以下、小論で用いる『孔子家語』および『説苑』、『新序』の本文は『四部叢刊』所収のものを底本とする。

(2) 向睹俗彌奢淫、而趙衞之屬起微賤踰禮制。向以為、王教由内及外、自近者始。故採取詩書所載賢妃貞婦、興國顯家可法則、及孽嬖亂亡者、序次為列女傳。凡八篇。以戒天子。及采傳記行事、著『新序』・『説苑』。凡五十篇。奏之。

(3) 原文は「後」とする。盧文弨『群書拾補』巻六「説苑校補」は「後下疑有脱文」とするが、孫詒讓『札迻』巻八「説苑」に「以文義校之、後當爲復之譌、下無脱文」とあるのにしたがう。

(4) 原文は「新事」とする。孫詒讓『札迻』巻八「説苑」に「新事當作新書、凡向所奏校定可繕寫者爲新書、荀子目録載向奏題新書、是其證也」とあるのにしたがう。

(5) 厳可均『全上古三大秦漢三国六朝文』全漢文巻三十七（中華書局、一九八五年）。

(6) 盧文弨『群書拾補』巻六「説苑校補」に「論語、焉可誣也。漢書薛宣傳作可憮、蘇林曰、憮、同也、兼也。晉灼曰、憮音誣。疑此誣亦與憮同義」とあり、池田秀三「劉向の学問と思想」（『東方学報』五〇、一九七八年）は注十で「盧説はもとより通じるが、恐らくは謹字の訛であろう」とする。ここではひとまず盧説にしたがう。

(7)『孔子家語』の方では、孔子が漁師のことを「仁人（の偶い）」としているのに対し、『説苑』の方では「聖人」としている。兪達「古書成書編輯体例研究―以『説苑』、『孔子家語』互見内容中関于孔子記載的差異為中心」（『湖南科技学院学**报**』第三四巻第三期、二〇一三年）はこれを、『孔子家語』が孔子を称揚するために漁師の評価を低くしたためであると分析し、今本『孔子家語』の文章に、後世の儒家による工夫・改変が加えられている証拠であるとする。

……同**样**，既然要塑造好孔子的形象，就需要**对**其他人适度降低，以期**衬**托孔子的**伟**，否**则**孔子的地位就**显**得不那么崇高了。因此在《家**语**》出于尊孔需要，**对**一些材料中他人的地方**进**行了降低**处**理。〝献**鱼**者〟的定位就是一个典型例子，**该**事**见**于《**说**苑・**贵**德》相**关记载**〝孔子之楚，有**渔**者献**鱼**

甚强〟，其事亦见于《家语・致思》。两者大致内容基本一致，但最大的区别在于对献鱼者的定位：《说苑》将之称为〝圣人〟而《家语》称之为〝仁人〟。需要指出的是，在《说苑》中未称孔子为〝圣人〟之处，而其他文献则称〝圣〟的情况不少。〝齐景公问子贡曰子谁师〟就是一例。在《说苑》中子贡称赞老师〝贤〟，而到了《韩诗外传》卷八的相关记载就变成了称赞老师为〝圣〟。放到整个历史背景之下，我们有理由相信，《说苑》与其他文献在这一点记载上的差别不是偶然现象，反映出汉代的儒生们对孔子尊崇的加深，而《家语》对〝献鱼者〟地位的降低，这是出于这一需要。

(8) 『孔子家語』王肅偽作説の形成やその再検討については、南澤良彦「『孔子家語』の流伝と評価との再検討」(『九州中国学会報』五一、二〇一三年)に詳しい。

(9) 韓自強「一号木牘『儒家者言』章題釈文考証」(『阜陽漢簡『周易』研究』、上海古籍出版社、二〇〇四年)、寧鎮疆「由『民之父母』与定州・阜陽相関簡牘再説『家語』的性質及成書」(『上博館蔵戦国楚竹書研究続編』上海書店出版社、二〇〇四年)、同「八角廊漢簡《儒家者言》与《孔子家語》相関章次疏証」(『古籍整理研究学刊』二〇〇四年第五期)、同「『家語』的〝層累〟形成考論—阜陽双古堆一号木牘所見章題与今本『家語』之比較」(『斉魯学刊』二〇〇七年第三期)、福田哲之「阜陽漢墓出土木牘章題考—一号・二号木牘を中心として—」(『中国研究集刊』致号、二〇〇五年)、同「阜陽漢墓一号木牘章題と定州漢墓竹簡『儒家者言』—『新序』『説苑』『孔子家語』との関係—」(『中国研究集刊』雨号、二〇〇五年)。なお、定州八角廊四十号漢墓の墓主は前漢中山懐王劉脩(卒年は前五五年)、阜陽県双古堆一号漢墓の墓主は汝陰侯夏侯竈(卒年は前一六五年)と見なされている。

(10) 注九前掲寧論文「八角廊漢簡《儒家者言》与《孔子家語》相関章次疏証」

(11) 注九前掲福田論文「阜陽漢墓出土木牘章題考—一号・二号木牘を中心として—」。

(12) 注九前掲韓論文「一号木牘『儒家者言』章題釈文考証」。

(13) 定県漢墓竹簡整理組「『儒家者言』釋文」(『文物』一九八一年第八期)。その記述に倣い、解読不能な文字は□で表し、疑わしい文字は□で囲んだ。また、一九七六年の唐山地震以前に記録され、地震による竹簡の損壊で確認できなくなった文字は〔 〕で括った。

(14) 『新序』巻五「雑事篇」と『説苑』巻十一「善説篇」の「晉平公問於叔向」章、『新序』巻五「雑事篇」と『説苑』巻二「臣術篇」の「齊侯問於晏子」章など。

(15) 『新序』巻四「雑事篇」の「魏文侯弟曰季成」章と『説苑』巻二「臣術篇」の「魏文侯且置相」章など。

(16) 他に『新序』巻一「雑事篇」の「晉平公浮西河」章と『説苑』

巻八「尊賢篇」の「趙簡子游於河」章、『新序』巻一「雑事篇」の「趙簡子上羊腸之坂」章と『説苑』巻八「尊賢篇」の「晉文侯行地登隧」章、『新序』巻八「義勇篇」の「佛肸以中牟叛」章と『説苑』巻四「立節篇」の「佛肸用中牟之縣畔」章の例などがある。なお、『新序』と『説苑』に収録された説話の重複については、黄震『黄氏日鈔』に指摘がある。

(17) 子謂、子賤、君子哉若人。魯無君子者、斯焉取斯。

(18) このことについて、廣常人世氏は『新序』(明徳出版、一九七一年)五九頁で次のように述べている。

漁者の口上は不敬罪に問われかねないものであるが、楚王の明察を信頼して謎をかけたにほかなるまい。その信頼に応じ得た楚王もまた仁智と評するに足る。「仁智と謂ふべし」は文脈から考えると漁者への評語であるが、この章の前後はやはり賢人や善言を察納すべき君道を説くものであるから、仁智なる楚王にしてはじめて漁者の仁智を知り得たと言いたいところであろう。

(19) 石光瑛校釋、陳新整理『新序校釋』上冊(中華書局、二〇〇一年)二〇一頁には、『説苑』の「孔子祭魚」の引用とともに、「『御覧』四百七十八亦引之、与此事頗相似、詎即一事而傳聞互異者邪」という指摘が見える。

(20) 野間文史「新序・説苑攷―説話による思想表現の形式―」(『広島大学文学部紀要』三五、一九七六年)、池田秀三「劉向の学問と思想」(『東方学報』五〇、一九七八年)、南部英彦「劉向『説苑』の公私観とその意味」(『研究論叢』人文科学・社会科学六一―一、二〇一二年)は、劉向の思想を読み取るための資料として『新序』と『説苑』を取り上げている。